

環境物質科学 (化1限)

- 人間がいることで、人間が自然にどのような変化をもたらすか調べる。
- 地球の自然の状態における元素・化学物質の分布と移動を理解する。

～第1章～

1-1 地球環境問題

1-2 環境問題と地球化学

物質のバッファランド濃度を知らなければならぬ。

1-3 化学で用いられるSI単位と接頭語

SI単位

量	記号	単位	単位記号
長さ	<i>l</i>	メートル	<i>m</i>
質量	<i>m</i>	キログラム	<i>kg</i>
物質量	<i>n</i>	モル	<i>mol</i>
時間	<i>t</i>	秒	<i>s</i>
温度	<i>T</i>	ケルビン	<i>K</i>

接頭語

$\times 10 \quad 10^2 \quad 10^3 \quad 10^6 \quad 10^9 \quad 10^{12} \dots$

デカ ヘクト キロ メガ ギガ テラ

$\times 10^{-1} \quad 10^{-2} \quad 10^{-3} \quad 10^{-6} \quad 10^{-9} \quad 10^{-12} \dots$

デシ センチ ミリ マイクロ ナノ ピコ

1-4 濃度の単位

% パーセント 百分率 10^{-2}

‰ パーミル 千分率 10^{-3}

ppm 百万分率 10^{-6} (part per million)

ppb : 10^{-9}

ppt : 10^{-12}

No.

Date

試料が固体の時、

g/g , mg/g , $\mu\text{g/g}$ 等で表現。
% ppm

試料が液体の時、

g/dm^3 , mg/dm^3 * dm^3 は l に相当。
% ppm

試料が気体の時、

dm^3/dm^3 , cm^3/dm^3 , cm^3/m^3 等で表現する。
% ppm

モル濃度

濃度は重量(気体の場合には容量)で表すのが一般的。

化学ではモル濃度をよく用いる。

ex.) 海水中のヨウ素

ヨウ素イオン I^- (原子量 127), ヨウ素酸イオン IO_3^- (分子量 175)

ある海水試料、全ヨウ素を定量すると、 $51 \frac{\mu\text{g}}{\text{l}}$ である。

ヨウ素酸イオンのみは $65 \frac{\mu\text{g}}{\text{l}}$ 。 ppb

それぞれモル濃度は $0.40 \frac{\mu\text{mol}}{\text{l}}$, $0.37 \frac{\mu\text{mol}}{\text{l}}$ 。

+), I^- として $0.03 \frac{\mu\text{mol}}{\text{l}}$, IO_3^- として $0.37 \frac{\mu\text{mol}}{\text{l}}$ ある。

モル濃度にイオン電荷数をかけたものをバルといふ。

+イオンのバル合計量は -イオンのバル合計量と等しい。

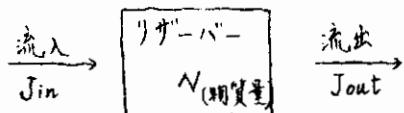
→ イオンバランス

1-5 物質收支と定常状態

海洋・大気等、地球の「ある部分」の化学組成はほぼ一定に保たれています。化学平衡状態にあるのではなく、物質の收支が釣り合っていることによる。

・地球のある部分の物質收支

ボックスモデル



N の時間変化: $\frac{dN}{dt} = Jin - Jout$, $Jin = Jout$ で定常状態
流出量 $Jout$ とはリザーバー中の N と関連する場合が多く、天然
ではしばしば $Jout$ は N に比例する。

$$\frac{dN}{dt} = Jin - hN \quad (h: \text{比例定数})$$

$$\text{定常状態では } \frac{dN}{dt} = 0 \text{ より}, \quad N = \frac{Jin}{h}$$

ここで最初の物質量を N_0 とし、定常状態になるまでの N の時間変化を計算。
上式を積分して

$$N = N_0 \exp(-ht) + \frac{Jin}{h} \{ 1 - \exp(-ht) \}$$

・平均滞留時間

問題とする物質がリザーバーに流れりから流出するまでの時間

$$\bar{t} = \frac{N}{Jin} \text{ と考えられる。前式との比較により。}$$

$\bar{t} = \frac{1}{h}$ となつてゐる。 $\frac{1}{h}$ は平均滞留時間に他ならない。

平均滞留時間はリザーバーの大きさと流入量の相対的大小関係
を表している。

ex.) $\bar{t} = 1000$ 年であれば、リザーバーの大きさが 1 年間の
 Jin の 1000 倍あるといふこと。

**付表 IV 大気中の化学成分の濃度
と平均滞留時間**

成 分	濃度 (ppm, 体積)	平均滞留時間 (τ)
変動の少ないもの		
N ₂	7.8084×10^4	$\sim 10^6$ y
O ₂	2.0946×10^5	5×10^6 y
Ar	9.34×10^3	-
Ne	1.818×10^3	-
He	5.24	10^7 y
Kr	1.14	-
Xe	8.7×10^{-2}	-
変動のあるもの		
CO ₂	$\sim 3.30 \times 10^4$	5 ~ 6 y
CH ₄	1.3 ~ 1.6	4 ~ 7 y
H ₂	$\sim 5 \times 10^{-1}$	6 ~ 8 y
N ₂ O	$2.5 \sim 3.5 \times 10^{-1}$	~ 25 y
O ₃	$1 \sim 5 \times 10^{-2}$	~ 2 y
変動の大きいもの		
H ₂ O	$0.004 \sim 4 \times 10^4$	9 day
CO	$0.5 \sim 2.5 \times 10^{-1}$	0.2 ~ 0.5 y
NO ₂	$0.2 \sim 10^{-1}$	~ 5 day
NH ₃	$0.1 \sim 10^{-1}$	2 ~ 30 day
SO ₂	$0.1 \sim 10^{-1}$	2 ~ 5 day
H ₂ S	$< 0.01 \sim 1^{-1}$	< 0.5 day
有機炭素	5 ~ 50 ^o	~ 2 day

* 単位は $\mu\text{g} \cdot \text{m}^{-3}$ (STP)

**付表 V 海水中の化学成分の平均濃度
と平均滞留時間**

元素名	濃 度 (mg · kg ⁻¹)	平均滞留時間 (τ) (y)	元素名	濃 度 (mg · kg ⁻¹)	平均滞留時間 (τ) (y)
H	1.1×10^6	-	B	4.5	(3×10^6)
He	6.9×10^{-6}	-	C	2.8×10^4	(2×10^6)
Li	1.8×10^{-1}	1×10^7	N	1.3×10^4	-
Be	2.5×10^{-7}	2.5×10^7	(N 化合物)	3×10^{-1}	(4×10^7)

(つづく)

元素名	濃度 (mg·kg ⁻¹)	平均滞留時間 (τ) (y)	元素名	濃度 (mg·kg ⁻¹)	平均滞留時間 (τ) (y)
O	8.8×10 ⁶	—	Ag	3 ×10 ⁻⁴	8 ×10 ⁴
CO ₂	6	—	Cd	8 ×10 ⁻⁵	1 ×10 ⁶
F	1.4	4 ×10 ⁴	In	1 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ³
Ne	1.4×10 ⁻⁴	—	Sn	1 ×10 ⁻⁶	1 ×10 ⁴
Na	11.033	8 ×10 ⁴	Sb	2 ×10 ⁻⁴	2 ×10 ⁶
Mg	1.325	1.2×10 ⁴	Te	—	—
Al	2 ×10 ⁻³	5 ×10 ¹	I	5.3×10 ⁻²	(4 ×10 ⁶)
Si	.2	1.4×10 ⁴	Xe	5 ×10 ⁻³	—
P	5 ×10 ⁻²	1 ×10 ⁴	Cs	3 ×10 ⁻⁴	1 ×10 ⁵
S	926	(4 ×10 ⁶)	Ba	1.4×10 ⁻²	3 ×10 ⁴
Cl	19.833	(3 ×10 ¹¹)	La	4 ×10 ⁻⁶	4 ×10 ²
Ar	5.0×10 ⁻¹	—	Ce	4 ×10 ⁻⁶	2 ×10 ²
K	413	3.2×10 ⁷	Pr	6 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ²
Ca	423	2.3×10 ⁷	Nd	3 ×10 ⁻⁶	2.5×10 ²
Sc	6 ×10 ⁻⁷	6 ×10 ¹	Sm	7 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ²
Ti	—	—	Eu	1 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ²
V	2	3 ×10 ⁴	Gd	9 ×10 ⁻⁷	3 ×10 ²
Cr	2 ×10 ⁻⁴	4 ×10 ⁴	Tb	1 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ²
Mn	5 ×10 ⁻¹	1 ×10 ⁴	Dy	9 ×10 ⁻⁷	4 ×10 ²
Fe	2 ×10 ⁻³	8 ×10 ⁴	Ho	2 ×10 ⁻⁷	4 ×10 ²
Co	3 ×10 ⁻⁵	3 ×10 ⁴	Er	8 ×10 ⁻⁷	6 ×10 ²
Ni	5 ×10 ⁻⁴	3 ×10 ⁴	Tm	1 ×10 ⁻⁷	5 ×10 ²
Cu	2 ×10 ⁻⁴	7 ×10 ⁴	Yb	8 ×10 ⁻⁷	6 ×10 ²
Zn	4 ×10 ⁻⁴	2 ×10 ⁴	Lu	1 ×10 ⁻⁷	5 ×10 ²
Ga	3 ×10 ⁻⁵	3 ×10 ⁴	Hf	7 ×10 ⁻⁶	5 ×10 ²
Ge	4 ×10 ⁻⁴	1 ×10 ⁴	Ta	<2.5×10 ⁻⁶	—
As	2.3×10 ⁻³	2 ×10 ⁴	W	1 ×10 ⁻⁶	1 ×10 ⁵
Se	1.1×10 ⁻⁴	4 ×10 ⁴	Re	4 ×10 ⁻⁶	1.6×10 ⁵
Br	69	(4 ×10 ¹⁰)	Os	—	—
Kr	2.3×10 ⁻⁴	—	Ir	—	—
Rb	1.2×10 ⁻¹	2 ×10 ⁴	Pt	—	—
Sr	8	3.6×10 ⁷	Au	4 ×10 ⁻⁶	4 ×10 ⁴
Y	1.3×10 ⁻³	9 ×10 ⁴	Hg	4 ×10 ⁻⁶	1 ×10 ⁵
Zr	1 ×10 ⁻⁸ ?	—	Tl	1.5×10 ⁻⁶	2.3×10 ⁴
Nb	1 ×10 ⁻⁸ ?	—	Pb	3 ×10 ⁻⁶	4 ×10 ²
Mo	1.0×10 ⁻²	2 ×10 ⁴	Bi	2 ×10 ⁻⁶	2 ×10 ⁴
Ru	5 ×10 ⁻⁷	—	Ra	1.0×10 ⁻²⁰	—
Rh	—	—	Th	1 ×10 ⁻⁷	2 ×10 ³
Pd	4 ×10 ⁻⁸	2 ×10 ⁴	U	3.3×10 ⁻²	2 ×10 ⁶

No.

Date

1-6 物質の移動

天然における物質の移動 … 流体の流れ

流体中の物質の拡散

流体の流量は一般に $\frac{\text{質量}}{\text{時間}}$ で表される。単位面積あたりの流量を用ひる方が便利なこともある。

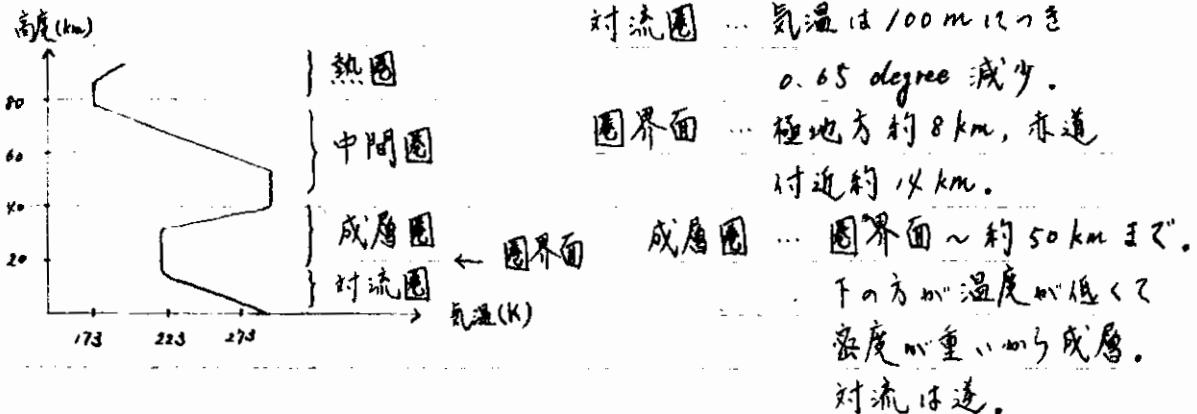
$$J = \rho U \quad (\rho: \text{流体の密度}, U: \text{流れの速さ})$$

拡散による移動 : $J = -D \frac{\partial C}{\partial z} + CU$ (D: 拡散係数, C: 濃度)

濃度勾配
分子拡散による流量 移流による流量

~第2章~ 大気を通しての物質循環

2-1 大気圏の構成



2-2 大気中の化学物質

(1) 気体成分

物質循環における尺度 … 濃度(存在量), 平均滞留時間 \bar{t} ($= \frac{N}{J_m}$)

(a) 反応性が極めて低く、 $\bar{t} \geq 1000$ 年のもの

N_2, O_2 (大気生成成分) Ar, Ne, He, Kr, Xe (希ガス) は
下層大気中で濃度変動は見られない。

(b) 反応性が比較的小さく、 \bar{t} が数年程度。

$CO_2, CH_4, H_2, N_2O, O_3$ (土壤・水中的微生物による生成)

$CF_2Cl_2, CFCl_3$ (フロン)

成層圏に運ばれて光化学反応で分解。

(c) 反応性が大きく、 \bar{t} が数ヶ月以内

$H_2O, CO, NO_2, NH_3, SO_2, H_2S$

雲や雨に溶けやすく、また、人工源の寄与が大きいため
大気中の濃度変動大。

2-2-2 エロゾル態の成分

海塩粒子、土壤粒子、火山や流星からの微粒子、

煤煙粒子、 $(NH_4)_2SO_4$ 等気体から生成した粒子

エロゾルは存在量は少くともこれが短いので(7~10分)

物質運動への寄与が大きい。

エロゾルの化学組成と濃縮率

濃度そのものは変動が大きく、その値に意味を持たせられ

ないことが多い。

濃縮率 Enrichment Factor

$$E_{\text{factor}} = \frac{\left(\frac{X}{Al}\right)_{\text{sample}}}{\left(\frac{X}{Al}\right)_{\text{soil}}} \quad \cdots \text{エロゾル試料中における元素XのAlに対する濃度比}$$

この式によって、エロゾルの起源がわかる。

もしエロゾルが単なる地盤成分の上に上りならば $E_F = 1.0$ となる。例えば海塩粒子等が混じていると Na の E_F は 1 より大。分子に Al を取るのは、Al が地盤の主成分であり土壤粒子以外の寄与が無視できるから。

Si の方が地盤に多いが、風化などで溶脱するので分母には用いない。

逆に海塩粒子中の他起源物質を考える時は

$$E_{\text{from}} = \frac{\left(\frac{X}{Na}\right)_{\text{sample}}}{\left(\frac{X}{Na}\right)_{\text{sea}}} \quad \text{を用いる。}$$

Cl は人間活動による放出があるので、基準にしない。

2-3 大気圏からの物質の除去過程

- ・化学物質の降下
- ・降水現象

H_2O のみでは9日、1年に約40回水は蒸発を行う計算になる。

(a) 降水による除去過程(湿式除去)

(i) レインアウト … 雲の中で化学物質が水滴に取り込まれる。

降水中の濃度は、降り始めから降り終わりまで変動しない。

(ii) ウォッシュアウト … 雲底で落下する雨滴に捕捉される過程。

降水中での濃度は降り始めに高い。

(b) 降水によるない除去過程(ドライフォールアウト、乾式除去)

・重力沉降による自然落下。

・樹木等に捕捉されたものが雨で洗い落とされる。

2-4 大気-海洋間の物質交換

・海塩粒子(海から陸へ)

海塩粒子の輸送量は海岸からの距離、高度、気象条件により左右される。

Tsunogaiらの研究によると、日本への Cl^- の年間降水量
(P : 単位は $\mu\text{-m}^{-2}\cdot\mu\text{-1}$) は

$$\text{日本海側} \quad P = 18.3 \exp(-0.029Z)$$

$$\text{太平洋側} \quad P = 7.9 \exp(-0.035Z)$$

Z は海岸からの距離(km)

No.

Date

・土壤粒子（陸から海へ）

北太平洋での大気中の土壤粒子の濃度は、陸からの距離とともに減り、大きな季節変動を示す。

→ 黄砂 etc...

深海堆積物の粘土粒子の堆積速度と黄砂の降下量はほぼ一致。

・気体の交換

気体交換速度：単位時間に単位面積当たりの表面積を通過する気体の量 F はその気体の分子拡散係数 D と濃度勾配 ($\frac{\partial C}{\partial z}$) の積で表わされる。

もし厚み dz の中に供給源もなければ、濃度 C は連続的に変化して $F = -k \Delta C$ (k : 交換速度)

～第3章～ 水圏を通しての物質循環

3-1 水の分布

海水 97.2%

氷河 2.15%

地下水 0.62%

淡水湖 0.009%

塩水湖 0.008%

懸垂水 0.005% (土壤湿気含む)

大気水蒸気 0.001%

河川水 0.0001%

3-2 海水

3-2-1 海は生命の故郷

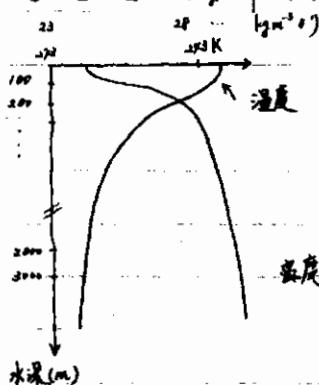
人体・海水・地殻および大気中の 10 主要元素

<順位> 1 2 3 4 5 ...

人体	H	O	C	N	Na	Ca	P	S	K	Cl
海水	H	O	Na	Cl	Mg	S	K	Ca	C	N
地殻	O	Si	H	Al	Na	Ca	Fe	Mg	K	Ti
大気	N	O	Ar	C	H	Ne	He	Kr	Xe	S

→ 人体と海水はとても類似している。

3-2-2 海洋の構成



海洋の水深 ... 平均 3800 m

表層 ... 約 100 m, よく混合されている。
冬は表面冷却による対流で
厚くなる。

中層 ... 100 ~ 1000 m 附近。
上下に交ざりにくい。

深層 ... 上下には交ざらないものの、
(深層海流あり)。

アラカリ、大気における成層図
に似てゐる... とわかる。

3-2-3 海水中の化学成分

海水中の塩分濃度 約3.5%，若干変動あり。

組成はほぼ一定。濃度には多少地域差あり。

平均滞留時間はプリント参照。

・ 主要成分と海水の化学組成の均一性

でか10年以上のもの

Na , Mg , Ca , K , Sr , Cl , $\text{S}(\text{SO}_4^{2-})$, Br 等。

強電解質 … 陽イオンの方が陰イオンよりも多い。

→ 海水のpHは8.0程度で弱アルカリ性。強電解質陽イオンの過剰部分をアルカリ度という。

海水主成分の主な供給源は岩石の風化。除去源は粘土鉱物や蒸発岩の形成。

・ 微量金属成分と海水中の化学成分の存在形

Fe , Cu etc … ては短い。粒子(コロイド)が海水中の塩類によって電荷を失い、塩析して沈殿する。

ここに多くの金属イオンが捕えられる。

栄養塩 … 海洋での生物生産に不足しがちな成分のこと。

N , P , Si (陸上では、 N , P , K) を指す。

* ケイ藻類や放散虫などからケイ酸塩の殻をつくる。

太平洋海水の栄養塩濃度は表層水ではほとんど0。

中層水では深さと共に増大し、水深1000mで

極大となる。

3-3 0.0001% の河川水

供給源 … 大気中の水蒸気（全天然水の 0.001%）

水蒸気のでは約 10 日。

水蒸気の供給源は主として海水の蒸発。

海水のでは約 4000 年。

3-4 水とともに移動する化学元素

水は海から出て海に戻る。途中で接触する岩石などのうち
化学元素を溶出する。主要元素と微量元素に分けて考えてみる。

主要元素：海水に供給される量 = 海水から除去される量である。

海水自体の量、溶存している各主要成分の量は約 20
億年においてほど変化なし。

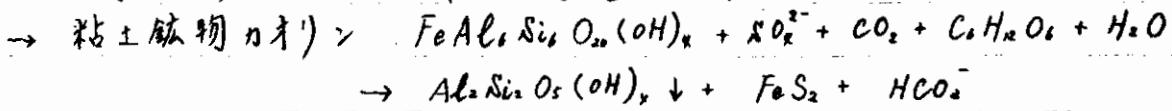
Input … 海上の降水と陸上の河川水を通して入ってくる。

Output … 海水表面からの飛沫、海洋沈殿物。

$A \approx B$ であり、Input については陸上の河川水からの供給量
を見つめればよい。汚染のない世界河川水の平均化学成分
濃度はわかっていて、全世界の河川水量を乘じ、海水に流入
する各主要成分量がわかる）。この中からもともと海水起源成分量を
除くと（Enrichment Factor 用ひる）非海水起源の化学成分
の量がわかる。これは主として、岩石や土壤に由来する。

それらが海水から沈殿物として除かれる。

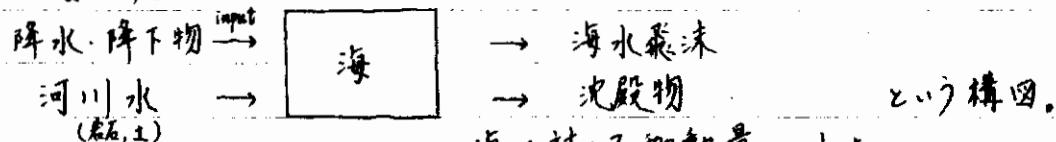
海水から除かれる主要な化学過程の例



No.

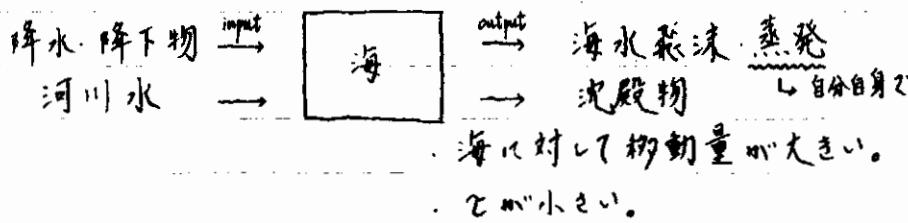
Date

まとめると、



・海に対して移動量が小さい。
・它是大きい。(約 10⁶ 年以上)

微量元素



～第4章～ 地球温暖化

4-1 地球のエネルギー収支

input … 太陽光エネルギー (主として可視光)

output … 地表からの赤外線

定常状態では input = output である。

・プランクの変位則 : $\pi - \gamma$ 波長 = $\frac{2.90 \times 10^6}{T}$

太陽光の $\pi - \gamma$ 波長は $\times 83 \text{ nm}$ (とある)。上式に代入する

ここで太陽表面の確定温度は約 6000°C となる。

逆に、地球の表面温度 $\approx 290 \text{ K}$ と、地球放射の $\pi - \gamma$ 波長は約 10000 nm (赤外線)

・シーティン・ボルツマンの放射法則

$$\text{放射エネルギー流束} = 82 \times 10^{-12} \cdot T^4 \quad (\text{cal} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{min}^{-1})$$

太陽からのエネルギーは地表で約 $2 \text{ cal} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{min}^{-1}$ (太陽定数)

アルベド … 太陽や地球の表面で散乱あるいは反射される

太陽エネルギーの割合。(inputとならないもの)

ここで、太陽光を受ける面積は πR^2 で、それを分ける地表面積
は $4\pi R^2$ であるから

$$82 \times 10^{-12} \cdot T^4 = \frac{1}{4} \cdot \frac{2 \times 0.66}{\text{太陽定数}} \text{ cal} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{min}^{-1}$$

$\therefore T = 252 \text{ K} (-2^\circ\text{C})$ … 理論上の地球平均気温

実際には約 15°C なので、他の要因を考える。

4-2 温室効果



大部分の大気成分は可視光を通す。

赤外光は O_2 や N_2 中を通過できるが、

CO_2 , H_2O は吸収されてしまう。

これにより地球放射の一部が地表に
戻ることになり、地表を熱する効果をもつ。

→ 温室効果

上記の温室効果により、約 35°C の温度上昇が見込まれる。

No. _____

Date _____

4-3 大気中の CO₂ 濃度

化石燃料の燃焼に伴う CO₂ の増加 → 温室効果の拡大

大気中 CO₂ 濃度

産業革命以前

280 ppm

1958年

312 ppm

1980年

337 ppm

1989年

350 ppm

1998年

363 ppm

現在

370 ppm

約 1.2 ppm/year 増加

人類が放出した CO₂ のうちの約半分が蓄積、残りは海洋に溶けている。また、missing sink of CO₂ もある。

4-4 温暖化が環境に与える影響

化石燃料の燃焼を通して約 200 億 t の CO₂ が 1 年間に放出される。

火山や温泉からの排出：約 1 億 t

人間の呼吸による排出：約 17 億 t

国民（人当たり）の CO₂ 排出量は、日本はかなり少ない方。

CO₂ 濃度が 2 倍になると、平均気温が $3 \pm 1.5^{\circ}\text{C}$ 上昇。海面は数 cm 上昇すると難定される。降水量は温度上昇により全体として増加。しかし、集中豪雨化して、土壤水分量は地域的に大きく変化。

～第5章～ オゾンの化学

5-1 オゾンとは…

O_3 として示される物質であり、漂白、脱臭、殺菌剤として用いられる。
 つまり毒性がある。

生成… O_2 を満たした容器内で放電するか、波長 242 nm
 以下の紫外線をあてる。

汚染大気中でオキシダントと呼ばれているものの大部分
 はオゾンである。

5-2 オゾン層とは

地球大気の高度 15~35 km 附近に O_3 が存在。(成層圏オゾン)
 オゾン濃度(数密度)が最も高いのは低緯度では 25 km,
 高緯度では 20 km 附近である。このオゾンを地上に持ってきてると,
 相対濃度としては約 200 ppbv となる。

相対濃度が最も高いのは高度 33 km 附近で 10 ppmV (高緯度地方)

求め方) 数密度 $5 \times 10^23 / m^3$

地上の空気 $1.2 g/l$, 空気の分子量 28.8

$$10^4 \times \frac{1.2}{28.8} \times 6.02 \times 10^{23} \div 2.5 \times 10^{25} \text{ 個}/m^3 \\ \frac{5 \times 10^23}{2.5 \times 10^{25} + 5 \times 10^{23}} \div 2.0 \times 10^{-7} = 200 \text{ ppbv}$$

～参考程度

成層圏オゾンは紫外線を吸収する。200~300 nm の紫外線
 をほぼ完全に吸収してしまう。

UV-A (400~320 nm) : キレイに日焼け。

UV-B (320~280 nm) : 皮膚炎を生じさせる。

UV-C (280 nm 以下) : DNA に支障。

No.

Date

5-3 オゾン層の発見

化学物質としてのオゾンの発見 … 1840年 ハーゼル大学のシェーンバウム
大気中にオゾンが存在する

ことを示したのは … 1881年 ダグラス大学のハート

実験室内でオゾンの紫外吸収スペクトルを測定。太陽紫外光
の強度の減少をオゾンの存在により説明した。

5-4 オゾン層の観測

・太陽紫外光スペクトル

鉛直の光路で積分した大気中のオゾン量 … オゾン全量

→ 色々な高度にある 0° を $0^{\circ}\text{C}, 1\text{ atm}$ の条件で地上に

持ってくると厚さ何cmになるか、ということ。

<単位> 1000分の1 $\text{atm} \cdot \text{cm}$: ドガソン単位

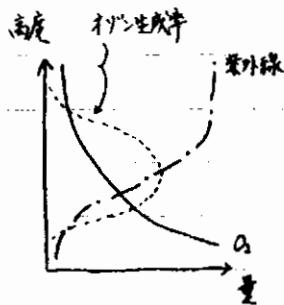
オゾン分光光度計 : 全世界 100, 所以上

人工衛星からもオゾン層を観測 (ニンバス7号)

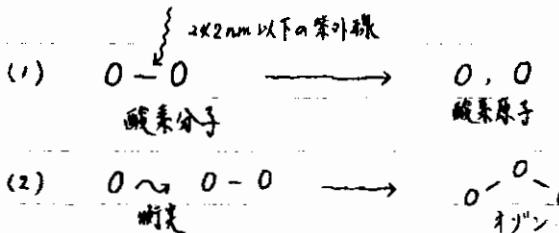
高度分布 … オゾンゾンデ

気球にオゾン検知器 (KI 溶液との反応)

をのせて、無線でデータを地上へ送る。



5-5 オゾン層の形成



形成されるためには材料としての酸素、エネルギー源としての紫外線 ($< 242 \text{nm}$) が同時に必要である。

つまり、

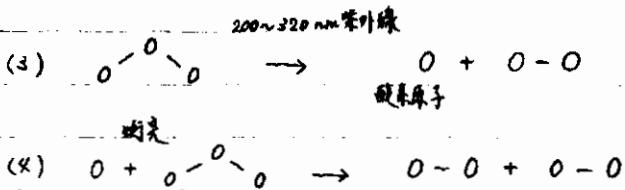
ある高度で極大を示すような高度分布になる。

オゾンの寿命: $20 \text{km} \dots$ 数ヶ月 ~ 1年

$30 \text{km} \dots$ 10日程度

$40 \text{km} \dots$ 1日以下

5-6 オゾン層の破壊



生成反応 … 酸素分子が光解離により 2 個の酸素原子になる。

分解反応 … オゾンと酸素原子との反応

以上の反応が実質的な速度を支配する。

オゾンの生成・分解反応速度は実験室内の実験で明らかに

なってきた。

→ 成層圏オゾンの応用

No.

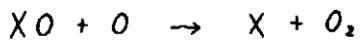
Date

成層圏オゾン濃度を計算すると、実際よりも高い値が出た。

～ オゾンを壊す未知の反応がある？

1960年代～1970年代はじめにかけて解明のために研究がなされた。結果、
酸化水素類 (HO_x , $x: 0, 1, 2$), 酸化窒素類 (NO_x , $x: 0, 1, 2$)
酸化塩素類 (ClO_x , $x: 0, 1$) がオゾンを壊すことがわかった。

触媒反応サイクル



正味) $\text{O}_3 + \text{O} \rightarrow 2\text{O}_2$ という反応。

人工物であるフロンが Cl ないし, ClO の起源になり, 触媒反応サイクルを加速。

～ 第6章 ～ フロンとオゾンホール

6-1 フロンとは

フロン … フロロフルオロカーボン (CFC)

フロン番号 … 1の位) Fの数

10の位) Hの数 + 1

100の位) Cの数 - 1

FC 化合物 … フッ素と炭素のみ

HFC 化合物 … 水素とフッ素と炭素

HClFC 化合物 … 水素, 塩素, フッ素, 炭素

特にオゾンに対して効果の大きいフロン … 11, 12, 113, 114, 115

→ 特定フロンという。

6-2 フロンによるオゾン層破壊のメカニズム

成層圏オゾン … 長い間、正常状態を保っていた。

1974年 F.S ローランドの指摘

フロンにより成層圏オゾンが破壊される可能性がある。

最初は疑惑的な見方をする人が多かったが、そのための研究は必要とされ、種々の実験が行われた。

対流圏では分解しないフロンが長い間成層圏に上り、紫外線で分解し、Cl 原子を放出する。 → 脱媒反応サイクルを加速

→ オゾン層の減少予測 室内実験データ } フロンによるオゾン層破壊はとても
理論計算 } ゆるく進行。より、観測が進めた。

1985年 南極オゾンホールの発見

6-3 南極上空のオゾンホール

6-3-1 オゾンホールの発見

イギリスのハレーベイ基地 … オゾン観測、毎年10月(春)のオゾン全量が1970年代後半から著しく減少。
*Nature*誌に1985年発表。

米国ニンバス7号 … オゾン量の世界地図を1日1枚作成した。
ニンバス7号データ見直し → オゾンホール *Science*誌にて発表。

No.

Date

6-3-2 オゾンホールの生成メカニズム

～どうして南極であり、どうして10月なのか？～

南半球の高緯度地方 ... 強い偏西風 → 極渦

南極大陸をとりまくよう1周。

～大気が遮断されて孤立：気温が着しく低下(約-90°C)

水蒸気や硝酸などが凍って微粒子となり、極成層圈雲(PSC)を生じる。

遠東貯蔵物質 ClONO_2 は PSC 表面で HCl または H_2O と反応。



春先9月頃になると光化学反応により Cl_2 や HOCl が分解して Cl を生じる。そして $\text{Cl}-\text{ClO}$ サイクルの開始。

オゾンホール内の化学的状態

- ・ ClO 濃度が中緯度成層圏の 100~500 倍くらい。
- ・ O_3 および O の濃度が極めて低い。
- ・ 窒素酸化物の濃度が低い。
- ・ 気温 -80~-90°C。
- ・ 水蒸気圧は極めて低い。
- ・ PSC が生成している。

6-4 モントリオール議定書と代替フロン

1987年にモントリオールで制定

「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」

5種のフロンと3種のハロンを1986年を基準として1994年までに
20%，1999年までに50%削減。

1990年、第2回

15種のフロン、3種のハロン、四塩化炭素、トリクロロエタン(2005年まで)
等を2000年までに全廃。

代替フロン

オゾン層を破壊しないフロン → 対流圏で分解し、成層圏で分解
しなければよい。

→ 構造式にHを含むもの (C-H結合はC-ClやC-Fより弱く、)
(大気中のOHラジカル等で分解)

温暖化係数(GWP)が小さい(必要あり)。

CF₄などは平均寿命が5万年と推定され、未知の何かが起きる
可能性もあり除外する方向。